
ホットニュース(平成13年度／第39号)

●今月の業界ホットニュース／～公共投資の転機～

塩川財務相は、経済財政諮問会議が今月中にまとめる基本方針にそって、財政構造改革の実現に向けて、公共投資を今後およそ10年で欧米並みのGDP比2%前後に削減することを目標と言っている。現在の約1/3の水準である。成熟社会に入り以前から想定されていた数値ではあるが、政府が具体的な数値として表明したのは初めてだと思う。また、あわせて道路特定財源の用途拡大や一般財源化も、現実的な課題としてとり沙汰されており、公共投資の枠組みが大きく変わっていくことになる。

さらにこれまで投資してきた施設の維持管理に掛かる費用も膨大である。甘い需要予測のため本四公団は既に破綻している。道路公団では2051年の償還計画に対して、交通量が予測値より2割少ない場合には、償還不能で借金は膨張しつづけ旧国鉄の二の舞になるそうで、地方の高速道路の交通量をみると、うそ寒い思いになる。

地方公共団体でも、箱もの投資のつけが大きい。ある市の予算書を見ると、産業活性化推進事業費として約14億円組んであり、一見現在の経済状況に配慮した予算額と思えたが、その内訳の大部は、情報文化センター整備費償還金補助と産業振興公社補助金の二つであわせて約12億円となっており、その他の産業活性化施策への配分は残りの2億円にすぎないのである。また最近図書館で新規購入図書予算が組めなくなりつつあるという。そのうち古い本ばかりとなり、古文書館となってしまうのではないかと危惧される。

いずれにせよカタチだけではない実像に迫る効果的な公共投資の内容を考えてもらいたいものである。

(代表取締役 堀田紘之)

●「きらっと生きる」バリアフリーのまちづくり

6月8日放送の教育テレビ「きらっと生きる」で目黒区のチェアウォーカー(車椅子生活者)中村健一郎さんが出演された。中村さんは目黒区身体障害者相談員であり、弊社の調査やまち歩きにもご協力下さる、活動派の方である。

番組では中村さんが編集されている雑誌「WaWaWa」※と、チェアウォーカーの方々がキャンプを行う企画が紹介された。番組を拝見して、その雑誌の充実度、企画の斬新さに驚いた。この雑誌は1)チェアウォーカーである編集者自らが検証し、情報提供している、2)バリアフリー情報に留まらず、話題のスポットやファッションといった、一般雑誌と変わらない内容とそれ以上の質を持っている、という二点において、非常に格好良く、新しい。

そして何より、バリアフリー整備の盲点に気づかされた。昨年策定された「交通バリアフリー法」に基づく整備では、「遊び」の施設は対象となりにくい。「障害者の方はあまり外で遊ばないだろう」という思いこみや心のバリアを持ったまま、交通施設や特定経路のみの整備を「義務づけ」するのではなく、高齢者や障害者の方のゆとりや楽しみなど、もっと広い視点からバリアフリーを考えていく必要がある。

※ 雑誌のHPは<http://www.wawawa-jp.com>

(第一計画室 阿部 朋子)

●最近の大店立地法について一言

弊社では大店立地法施行以前から大規模商業施設に係わる交通計画及び出店のための行政等との協議を行ってきた。

立地法施行前は、これらの検討に法的義務はなく、出店者が独自に行ってきたものである。したがって、開発の内容に応じて必要に迫られた調査を行うため、調査項目・内容など一つ一つが手作りであり、開発が周辺に及ぼす影響を最小限に留め、その中でどうしたら交通の処理が良くなるかを中心に検討を進めてきた。

立地法施行後は、立地法によって検討必要項目が明確化され、検討事項が増えたことにより調査費全体が増加し、事業者への負担が増えた。一方で、検討の方法が画一化されたため、立地法をクリアするためだけの調査になってきているような気がする。

立地法における検討は、周辺居住者のために行うものであり、開発者側で対応できることは、できる限り

十分な対応をすることが必要である。しかし、交通に係わる問題の解決方法は、机上の検討や事例データだけでなく、実際の運用面によるところが大きい。したがって、オープン時の状況だけでなく、その後の平常時の状況を踏まえた上で、対応が可能な計画となるように、立地法の検討事項においても、運用面による変更等が行える余地が必要であると考えられる。

(交通計画部長 大沼 安秀)

=====

●青年海外協力隊レポートvol.1～モロッコってどんなところ？

—首都ラバト編

=====

2001年4月2日、ついに、モロッコ入り、そして、オリエンテーション、表敬訪問の後、ここでもまた現地語学訓練が始まった。今度はフランス語を3週間とアラビア語が10日間(ちなみに土曜日も授業がある)。なお、この間は現地の家庭へのホームステイである。

モロッコの第一印象は、だだっ広い、というものである。空港の周辺は見渡す限りの平地である。そしてやはり貧しい、汚い、という印象は拭えない。空港自体はきれいだが、空港から都心へ至る道沿いは、スラム街らしき街並みと整備不良の道路、すれ違うおんぼろの車、となんだかマイナスイメージばかりである。しかし、首都へ入ってみると、様子は一変する。きれいに街路樹の植えられた幅の広い道路、広い公園、白い壁と四角い建物の統一感のある街並みと新しさを感じさせる。一方で、12世紀に端を発する旧市街地区(メディナ※)、17世紀に建造された城塞(カスバ※)、12世紀の塁壁をほぼそのまま残すルワー門※と、歴史を残す建造物も多い。驚くのは、これらが自然に街中に点在していることで、ルワー門などは多くの車が日常的に通過している。もちろん、メディナ、カスバ共にその中で生活している人も多くいる。

また、モロッコはイスラム教を国教としており、街のあちこちにモスク※を見かけることができる。1日5回のお祈りの時間には、それを知らせるアザーンが流れ(ちなみに朝は明け方4時。おかげで最初のうちは何度も起こされたが、1ヶ月後には平気で寝ていられるようになった)、生活の中にイスラム教が根付いていることがうかがえる。

モロッコの首都ラバトは人口からみれば第3番目の都市であるが、政治の中心地だけにとってもきれいに整備されている。しかし、歩道の整備不良が目立ったり、車の排気ガスによる大気汚染がひどかったりと内在する問題も多々あるようだ。

(モロッコより第三計画室 酒井 タ子)

アルメックホットニュース(平成13年6月15日発行)

////////////////////////////////////